百花燎爛

十一日、頭臺（トータイ）（又塔爾奇阿（タルチア）滿（マン）と稱す）を經て行程五里餘、蘆草溝（ルーツアオコウ）即ち廣仁城（ホワンニン）に入る。道路初めの三分の二は、急坂石多く、後の三分一は路側に松、樺、白楊李其の他雜灌木を混せる樹林を成せり。就中、李花既に滿開して蒼樹と相交り、翠微の間に白濛々を望み前途の路畔亦百草の紅白を裝へるを見たるは、蓋し渡淸以來の眺めにして、前日三臺に氷雪に接し、今東風の駘蕩に浴するは一日を間して、宛然冬より春に渡りたるの感あり。之を曩の四棵樹畔、夏の如く又冬の如くなりしに對照すれば敢て怪しむに足らずとす。

柳樹溪間被雪眠　梨花郊外帶風然
一時併見春冬景　亦是人間小變遷

芦草溝

蘆草溝は塔爾奇の谷口を扼する方形の土城にして、伊犂七城の一なる廣仁城即ち是なり。人家約百戸、歩隊一營、馬隊一旗を駐屯せしめ麥、大麥、豌豆、粟、玉米、及高粱等を產す。

十二日右に妖魔山を望み、塔爾奇河の右岸に沿ひて南に下れば、左右は緩徐なる盆地を成し、一般開濶にして耕田多し、塔爾奇河を渡りて、地窩堡（チウオプ）より東南に進み、行